

追悼文

## 川添昭二先生のご逝去を悼む

太宰府市公文書館 重松 敏彦

私が川添昭二先生ご逝去の報に接したのは、平成30（2018）年3月22日午後10時ごろでした。その日は4月から太宰府市文化ふれあい館で開催される、明治150年を記念した企画展示のため、山口市まで資料借用に出かけ、長時間の車の運転で疲れてしまい、少し早い時間でしたが床に就こうとしていた矢先でした。しかしその報にふれて、この間、先生からいただいた数々の学恩が頭を過ぎり、眠れなくなったことを覚えています。周知のように、川添先生のご専門は日本中世史ですが、こと九州の地域史については時代を問わず、常に深いご関心をおもちでした。私と先生との接点は大学の学部・大学院在籍の頃にさかのぼりますが、ここでは最も親しくかわりをもたせていただいた太宰府市史編さん事業を中心に、先生との思い出を綴らせていただきます。

私が川添先生からのお誘いを受けて、太宰府市史編さん室に勤め始めたのは平成元（1989）年4月のことでした。市史編さん事業では、先生のご意向により2か月に1回、編集委員会が開催されていました。それは編集委員の先生方に、市史編さん事業への関心を常にもちつつ、その進捗状況を共有していただくことがねらいでした。開催の一週間ほど前には先生のご自宅にお伺いして、打ち合わせを行っていました。その場では、委員会の話ばかりでなく、これまでのご研究や現在のご関心などを伺うことができ、本当に楽しい時間でした。

川添先生は、自治体史編さん推進のなめは、研究と広報にあると常々おっしゃっていました。太宰府市史に即していえば、それは太宰府市史研究会の開催であり、また太宰府講演会の開催と市史だよりの連載でした。太宰府市史研究会は、編集委員会の終了後、各分野の編集委員および執筆者などに依頼して研究報告を行ったものです。そのことを通じて各分野の研究状況を共有できることが重要でした。席上では、当日の担当分野とはまったく異なる分野からの質問が出されるなど、研究会としてきわめて刺激的であったと思います。

一方、太宰府講演会は市史編さんの広報活動の一環として、年4回開催されたものです。また市史だよりの、各分野で分担執筆を行い、市の広報紙に連載されていました。正直に言えば、



平成17年『太宰府市史』全巻完結記念講演会にて講演される川添先生

年4回の講演会を開催することは日程調整や人選など、かなり厳しい面もありました。市史だよりの場合はほぼ毎月のことですから、校正のやりとりを含めてやはり大変でした。しかし、川添先生が市史編さん過程における研究成果をできるかぎり市民に還元すべきであるという強い思いの中で企画されたものであり、これらは市史編さん事業の広報活動の展開に、大きな役割を果たしました。こうした事業を進めていく中で、私は川添先生から多くのことを学ばせて

いただきました。たとえば、講演会を開催する際、もし万が一、講師に事故があった場合、来場者に対して申し訳ないと、かならず代わりになる講演原稿を準備されていたとお聞きしたことがあります。大学では、二度、同じ内容の講義をされたことがないともお聞きしました。いまでは私も、講座などを依頼する立場になることもありますが、とても代わりの講座原稿を準備するまではいきません。ただ、数年前まで続けていた非常勤の大学講義では、先生にならって同じ内容の講義はしないよう心掛けたことを、いま思い起こしています。

市史編さん事業も佳境にさしかかったころ、有馬学編集委員（九州大学名誉教授、現福岡市博物館館長）の提案によって、太宰府市史に新たな一冊が加えられることとなります。それが『「古都太宰府」の展開 太宰府市史通史編別編』（以下、別編）でした。現在、私たちがいだいている「古都太宰府」という地域イメージがどのようにして生まれ、そしてそれがいかに展開していったか、を明らかにしようとしたものです。このイメージがすぐれて近代的な所産であることは、別編所収の有馬委員による序章を読めば明らかですが、一方で別編には、その前提として「第二章 近世における太宰府研究」が立てられました。川添先生は日頃から、近世の太宰府研究は（１）古代大宰府研究、（２）高橋紹運をめぐる問題、（３）太宰府天満宮をめぐる問題、の三つの観点から検討されるべきだと主張されており、その構想がそのまま別編に組み込まれたのでした。

それはご自宅での編集委員会打ち合わせの折だったと記憶しています。川添先生はこうおっしゃったのです。「今度の別編第二章の執筆については、（２）（３）はわたしが書くが、（１）はわたしには書けないので、君が書きなさい。」と。とんでもない、先生がお書きになれないはずがないと思いましたが、先生は、なかなか論文を書こうとしない私に、執筆の機会を与えてくださったのだと考えて、お受けすることにしました。できあがった文章を、先生はまさに「笑覧」されたのではないかと思います。しかし、このことは私を、古代大宰府研究を通して近世の史料に向かわせるきっかけとなりました。いま私は、太宰府市文化ふれあい館で毎年開催される「まると太宰府歴史展」において、近世・近現代分野の展示を同館学芸の諸君とともにを行っています。私がまがりなりにもこうした近世の展示作業にかかわることができるのは、別編論文を手掛けたからにほかなりません。これも先生からいただいた大きな学恩です。

先生の通夜式に参列させていただいたとき、お嬢様が弔問の方へのご挨拶のなかでこうおっしゃいました。「川添は、とっつきにくいと思われがちですが、長くつきあっていただくと、茶目っ気のある性格ということが分かっていただけなのです。」と。市史編さん事業を通じて20年近くおつきあいをさせていただいた私は、この言葉を本当に実感したことをなつかしく思い出していました。

平成26（2014）年4月、私たちにとって念願であった太宰府市公文書館が開館しました。先生にはご無理を申し上げて、引き続き公文書館委員会顧問にご就任いただきました。このことが私たちの大きな支えとなったことはいまでもありません。公文書館の業務を通じて、先生がお考えになっていた「太宰府学」の構築ということに、私たちがどれほど寄与できるものか心許ないのですが、それぞれができることをできるだけ、との思いをもって取り組んでいくことをお誓い申し上げるとともに、衷心よりご冥福をお祈りいたします。